

心身のゆがみに通じていると言いきる確信はないが、保育園、幼稚園はなんといっても乳幼児にとつての生活の場であることにはまちがいない。そこでの日常生活用品のあり方は保育そのものとのつながりから今まで以上に注意深く考えなければいけないはずである。そんな中で、最近『保育

園のええもん』という本に考え方をまとめてみたが、つくり手側からのみではどうにもならず、「ええもん」（いい物）は今後も保育の中でそれらを使いこなす現場とのプロジェクトチームの中でつくりつづけていくしかないと思っている。

（かて工房）

開発途上国での想いを帰国後も

協力隊幼児教育ネットワークの活動

前田美知子

青年海外協力隊の幼児教育隊員派遣

アジア・中近東・アフリカ・中南米・大洋州・

東欧の開発途上国の中に、幼児教育の歩みが少しずつ進んでいます。これらの国に青年海外協力隊の幼稚園教諭隊員・保育士隊員の派遣は二十年の

間に三十か国、のべ二百三十名を超えました。

隊員は文化や教育観も異なる国で、人物・お金も「ないないづくし」の中、保育の経験、技術、知恵を絞って活動します。その国の言葉を話し、庶民層あるいは貧困層の子どもたち、先生たち・保母たちと共に暮しながら、少しでも生活を、保育をよくしようと実践します。どんな環境であっても「自発的参加」と「工夫の精神」に裏打ちされた責任感・積極性・忍耐力そして応用力をもって立ち向い途上国の人々と協調した、二年間の任期を充実感をもって締めくくります。

帰国のときから

日本の幼児教育とは質の異なる厳しさ、楽しさを体験し、活動を終えた隊員は帰国の途についてたとき、第二の故郷ともなった任国への想いと同時に、日本に戻ってからの自分の生き方への模索を

始めます。また、開発途上国に対して自分のできる支援活動はないだろうかと考えを回らせます。

同じ想いをもつ帰国隊員たちが、平成四年「幼児教育ネットワーク」を発足させました。

会の目的は、①帰国隊員の情報交換、②現在途上国で活動している隊員への支援、③協力隊の幼児教育分野の募集への協力。

機関誌として通信を発行し、年一回は「幼児教育ネットワークの集い」を持つこと。

しかし、帰国後しばらくは、日本の社会の中で生きていくことで精一杯。細々と通信を発行するのがやっとという状態。協力隊の技術指導を続け、全隊員とつながりをもってきた私（前田）が相談役として応援するようになりました。

古い絵本・おもちゃを現地の隊員に送るための作業など、できることをこつこつとやりながら会としての活動を考えていきました。

このような中で、OME P（世界幼児教育機構）に参加し、協力隊活動を発表したところ、「保育者の実践による国際協力活動」として多くの方が関心を示されました。当時は国際協力が叫ばれ始めた時でしたが、普通の保育者が外国で実践をするということは、ごく少なかったのです。私たちは開発途上国の幼児教育への理解と支援を訴える役割を自覚し、努力しようと話し合いました。

ネットワーク通信の発行

帰国隊員は日本全国、海外にも在住しています。通信の発行は、貴重な情報交換の場、現地の隊員への激励の場、現地の幼児教育情報を盛り込む場として会の大切な柱です。

帰国後の職場復帰、通信教育・大学入学、主婦として子育て奮戦、国際協力関係の仕事、NGO

への参加やあるいは国際結婚、それぞれの立場から現在の想いを伝え、交換するなど誌面は充実してきました。編集・印刷・発送は遠距離の会員でも、交代・分担で行えるところまで成長してきています。

国際協力フェスティバルへの参加

多数の国際協力関係の団体が、国際協力の日に日比谷公園に集合する大イベントに毎年出展します。パネルで途上国の保育現場の実践紹介、協力隊応募を考えている人への相談、途上国のおもちゃ民芸品の即売など。

しかし「幼児教育ネットワーク」ならではのものは「遊びのコーナー」。遊びの名人でもある隊員たちがフィリピンのバンブーダンス・スリランカのココナツポックリ・マレイシアのチョンカー・各国の食器によるままごと遊びなどを展開

すると、アジア・アフリカ・日本の子どもも大人も集まって遊びに熱中。

ここはまた、子どもを連れられた帰国隊員が安心して子どもを遊ばせながら話のできる場として貴重です。国際協力フェスティバルの中で子どものために用意された楽しい場所です。

帰国隊員と派遣中の隊員の連携

現地の隊員は、開発途上国の幼児教育がかかえているさまざまな問題にぶつかり、試行錯誤しながら活動しています。そこで幼児教育ネットワークの組織を通してアンケートを送り、回答をまとめました。これをもとに、開発途上国の実態と協力隊活動の在り方を考察し、成果を次のように生かしています。

①「隊員活動の在り方」をまとめて、現地で活動中の隊員に送り支援とする。



▲国際協力フェスティバルの「遊びコーナー」
子どもを連れられた帰国隊員の楽しい語らい

②日本保育学会においてシンポジウムを行った
り、研究発表を行い自らも学ぶ機会とし研究者・
保育者・学生にも情報提供する。

勉強会

派遣国も世界中にひろがっているので、次々と
帰国する隊員の話聞く会を隔月にもつことがで
きます。中国・モンゴル・ブルガリア・モルデー
ヴ……発表者にとっては、自分の活動のまとめの
機会となり、聞く側にとっては新に情報を吸収
し、協力隊時代に培ったものを思い起して活力の
源とします。

開発途上国からの研修員を迎える

隊員の現地での活動が効果的に展開し、日本の
幼児教育の良さが相手の国に理解された場合、カ
ウンターパート研修が実現することがあります。

途上国での協力者が、日本の教員養成校や保育の
現場で研修するために、十か月ほど来日するの
で、

カウンターパートと前後して帰国した隊員や、
ネットワーク会員が支援の輪をひろげます。この
ような研修生を暖かく迎え協力することによっ
て、幼児教育の交流がより深くなっていくものと
思います。

(協力隊幼児教育ネットワーク相談役)